

ものづくりに携わる道

森本 敏明



過去・現在・未来と時が流れるのに伴い、過去に自分はどのように考え、現在は何をしており、未来に対して何を思うのかについて紹介したい。

人生設計

90年代前半。バブルが崩壊した頃に東京理科大学へ入学。世の中の景気は悪くなるばかりで、とても浮ついた学生生活を送ることができない。そのとき考えたことは、これからどのように生きていこうか、ということ。大学に入学して、真っ先にしたことが人生設計である。

20代。とにかく勉強に励むことに決めた。周りが遊び呆けていても、自分はひたすら勉強しよう。

30代。生涯を捧げる業務に没頭する。好き嫌いを問わず、とにかく仕事をして経験する。

40代。これまで勉強してきたこと、仕事で経験したことを活かす。20代、30代のインプット中心から、アウトプット中心へ移行する。

50代。これまでのインプット・アウトプットを、後進へ伝える。教育を中心とする。

60代。緩やかに業務を後進に譲りつつ、新たなことにチャレンジする。

この人生設計のもと、20代はよく勉強をして、技術士、弁理士をはじめとする国家資格を取得した。30代は、特許事務所に転職し、やがて開業して、さまざまな業務を経験した。40代の今、知識・経験が備わった国家有資格者として、日々の業務に没頭している。

若者の特権は惑い、悩むこと

このように言うと、まるで人生設計の通りに歩を進めたように思えるかもしれない。しかし、決してそんなことはなく、挫折や葛藤は日常茶飯事。目の前に一本の道があったわけではなく、無数にある道の一つひとつ選択しながら、今に至っているのだと思う。

20代の頃は、焦りしかなかった。今のままでいいのだろうか。布団に入っても眠れない日が続いた。いよいよ経済がどうにもならなくなり、会社に頼らない人生を、

と起業ブームが訪れる。いわゆる、第三次ベンチャーブームである。起業系の書籍や雑誌が相次いで出版され、Win95からWin98へとOSが進化するに伴いインターネットが普及し、誰もが簡単にビジネスのできる環境になった。

こういった環境の中、自分には何かできないだろうか、と一人悶々としていた。今振り返ると、何かできる力は到底なかったもので、早まった行動をとらなくて正解であった。

もちろん、身を振っているだけではどうしようもないので、当初の計画どおりに、勉強だけはした。専門であるバイオの勉強はもとより、環境化学、分析化学、統計学、プログラミングなどについて習熟した。環境化学は完全な独学だったので、目標をおいた方が良いと考えて国家資格である公害防止管理者(水質一種・大気一種)の試験を受験し、合格した。分析化学の学習の一環として、大学内にある分析装置の実機を見て回った。新たな分析装置が導入されたと聞けば、説明を聞きにいったものである。

大学4年生になって、希望する研究室に配属されることになり、さらに英国ロンドン大学で学ばせていただく幸運もありながら、研究を続けるべく東京理科大学大学院へ進学した。研究を続けつつも、今後の進路をどうしようかと考えるようになる。このとき、基礎的な学習書の他に、経営者や産業界の評論家が執筆した書籍を多読した。その中でもっとも感銘を受けたのは、唐津一氏(故人)の『「ものづくり」は国家なり 日本・IT大国への道筋』(PHP研究所)。製造業に対して並々ならぬ想いが秘められた書籍である。自分でも驚くぐらいに感化されてしまい、終生ものづくりに携わって生きていこう、という想いを抱くようになった。もちろん、この想いは今も変わっていない。

進路を考えるにあたり、自分の性質を鑑みると、研究は好きだけでも、基礎研究よりは応用研究の方が向いているので、アカデミアの世界よりも産業界で研究がしたいと考えた。一方で、ものづくりに携わるといっても、

ものづくりをする立場だけではなく、ものづくりを支援する立場もあるのではないかと考えるようになった。「コンサルティング」という業務があることを知ったのはこのときである。そして、「コンサルティング」に興味を覚えるうちに、技術分野のコンサルティングを手掛ける技術士という資格を知り、技術士第一次試験（環境）を受験し、合格した。日本技術士会や各部会では合格者歓迎会を催してくれる。環境部門の部会である環境部会の合格者歓迎会に参加して、進路について迷っているんだけれども、と相談させていただいた。先輩技術士からは、「ものづくりをする立場」での経験は「ものづくりを支援する立場」できっと活かされる、チャンスがあるのであれば「ものづくりをする立場」を経験した方が良く、という助言をいただいた。この言に従い、「ものづくりを支援する立場」への想いを封印して、まずは「ものづくりをする立場」、すなわち、製造業を営む会社に対して就職活動をして、無事に山之内製薬株式会社（現 アステラス製薬株式会社）から内定をいただいた。

転職するという選択

会社は居心地が良かった。仕事も楽しく、給料をいただくことで、経済的なゆとりもできた。ただし、現を抜かしそうになりながらも、勉強することは継続した。会社からの要求もあって計量士（環境濃度・一般）を受験して合格。技術士第二次試験も受験し、合格した。なお、技術士第二次試験では、最初は経営工学部門にチャレンジした。これまでに統計学を学習し、業務を通じて品質管理の知識も蓄積したことから、試してみたかったのである。しかし、あえなく不合格。技術士第二次試験は付け焼き刃の知識だけでは合格できない。確実な知識と経験が相俟って、初めて合格できる試験である。翌年、本来の専門分野である生物工学部門で受験して、合格するに至った。

ここで転機が訪れる。会社が合併という道を選んだのである。環境が変化する。そうであれば、自分自身も変化する時期なのではないかと考えるようになった。このとき29歳。当時は30歳を過ぎると転職先がないといわれていた。決断するなら今しかない。ありがたいことに、会社内でいろいろと経験させていただき、「ものづくりをする立場」の経験を積むことができた。いよいよ「ものづくりを支援する立場」に移る時節到来と感じた。

「ものづくりを支援する立場」になるために、いきなり技術士事務所を開業して独立する、という考えはな

かった。そこで、コンサルティング・ファームを受けてみる。ただ、経営系のファームの面接官とは意見が合わない。パートナー面接（最終面接）を受けるも、手応えがないまま終わる。この面接を通じて、大手ファームのパートナー・コンサルタントと議論ができたことは良い経験にはなった。それと同時に、自分は経営コンサルティングをやりたいのではなくて、技術コンサルティングがやりたいのだという気持ちがより明確になった。この後、コンサルティング・ファームへの転職は断念した。そして、技術コンサルティングとは何かを考えるうちに、技術開発の終着点は何かを考えるようになる。転職前に身を置いていたのは製薬会社。医薬品を製造販売する会社である。医薬品は純粋なまでに特許がすべて。特許が存続している間は利益を上げることができ、特許の存続期間が満了したら利益が激減する。技術開発の先に特許があり、特許を避けては通れない。技術開発の支援をできても、特許の支援をできないのであれば不完全ではないか。換言すれば、技術開発に続いて、特許取得の支援ができれば、ワンストップ・サービスが提供でき、強みになるかもしれない。ここで道が決まる。弁理士試験に合格し、弁理士としての修練を積むという道である。

山之内製薬株式会社と藤沢薬品工業株式会社が合併してアステラス製薬株式会社が誕生した翌年、弁理士試験に合格し、特許事務所へ転職した。

道は続くよ、どこまでも

「ものづくりを支援する立場」に早くなりたいという焦りがありながらも、弁理士業務はそう甘くはない。一からじっくりと身につけなければ、それこそペーパー有資格者になってしまう。幸いなことに、優れた師のもとで弁理士業務について指導を仰ぐことができた。弁理士業務は職人の業である。正直、30歳になってからの一からの徒弟制は厳しかったけれども、おかげで弁理士としての思考・知識が定着し、書面作成その他の実務が身に付いた。そして、その後、独立開業するに至り、技術士として、弁理士として、業務に励む毎日を過ごすことになった。

気が付けば、開業して今年で10年になる。教育を中心に据える50代まで、まだあと数年ある。60代になってまた「ものづくりをする立場」に戻る。それも有りだろう。

これからの道がどういう道なのか、不安に駆られることもあるけれど、未だに期待で胸が踊る今日この頃である。

<略歴> 2000年 東京理科大学大学院 基礎工学研究科 修了(工学修士), 同年 山之内製薬株式会社 入社, 2005年 技術士(生物工学部門)登録, 2006年 弁理士登録, 同年 都内特許事務所 入所, 2010年 モリモト特許商標事務所 開業(主として, 弁理士業務), 2012年 株式会社モリモト・アンド・アソシエーツ 登記(主として, 技術士業務)

<趣味> バスケットボール, テニス, スキーなどの運動競技, NFL, NBAなどのスポーツ観戦, ライフワークは英語の勉強